

晩秋の焼尻

磯野利男



ヤカエデ、ツルアジサイやシナノキの黄葉が木洩れ陽に映えている。

潮騒は消え、風の音もなく、梢をわたる小鳥の囀が静寂の空間を流れる。足を止めて大きく息をする。この島に住む喜びを感じるひとときである。

焼尻で紅葉するのは、ナナカマド、ヤマブドウ、ウルシ、ツタウルシ、ユマユミくらいのもので、エゾヤマザクラやミヤマガマズミは愛でる暇もなく散ってしまう。数は少くとも、黄葉の中での朱は一際目立つ。

殊に「幻想の径」の両側のコマユミは鮮やかに染っている。

焼尻の代名詞のオンコは樹冠も枝も枯葉を冠り、真っ赤に熟れた実が積んだ枯葉の間から零れそうである。今年例年に比べ殊の外実付きがよい。ウン、マヒワ、シジウウガラなど、枝から枝を渡り、忙しげに実を啄む。思いなしか、ウンの喉元の紅は春のそれより色が冴えている。

やがて、オンコの実を求めてツグミ、レンジャクの大形の野鳥も飛来する。彼らが来ると、林と言わず庭と言わず、島中のオンコの実が樹上から消える（大方は樹下にはばら撒かれるのだが）。そして彼らは慌しく去っていく。その間旬日を出ない。

コクワ、サンナシ、ナナカマドの実はまだ枝には無い。僅か残されたミヤマガマズミの実が、葉の無い枝先でゆ

秋も深まった十月下旬のうららかな日に、自然林や草原を歩いた。

春、夏、秋と余暇をみては歩いて廻るが、冬の訪れも近いこの時期に、丹念に見て歩くのも毎年のことで、やがて冬眠に入る林の木々や野の草々の様子を確かめておきたいのと、萌える新緑の候から次ぎ次ぎと花を咲かせて、島を彩った木や草に懐いの思いもあつてのことである。

木枯にはまだ間があるのに、林を取りまく外側の樹の多くは既に葉を落し、残るものもほとんどが枯葉である。

自然林内を縫うようにして続く散歩道は落葉が敷き詰め、踏みしだく爪先にも枯葉が舞い落ちる。

浜風をもろに受けない中央部では、林の様相が一変する。ミズナラ、イタ

れている。

季節風が吹き、三日四日と時化が続くと浜に食べ物が向くなり、カラスが餌を求めて林に入り木や草の実を漁る。自然は惜しみなく恵を与えて差別はない。

林床では、ツルアリドウシの小粒で赤い実が落葉の間から顔を覗かせ、雑草に絡んだツルリンドウの実の朱が目にも染みる。わずかだがヤブコウジの実も見られるが、イワツツジは枯れてしまっている。

夏に、ぼうずになったエゾオニシバリ(ナニワズ)の新葉が出揃った。林床に見る濃緑の群落は、葉が世代交替したエゾユズリハである。かつては正月の注連飾用に伐られたが、いまは誰も伐らない。

数ないギンリョウソウが一株持去られた跡がある。

エゾノコンギク、オオアザミがまだ咲いている。林の入口近くの道端でミズヒキが長い花穂を出している。

林の中の池ではスイレンが最後の花を咲かせ燃え盡きようとしている。焼尻にはエゾヒツジグサの自生はないので、むかし本州系のを移植したのであろう。

大正四年(一九一五年)、大正天皇の即位記念事業でこの辺りを整備して、「雲雀ヶ丘公園」と称した、と旧焼尻村の記録にあるから、スイレンもこの

頃のものであろうか。島内の他の池にも同じものがある。

鯉が茎の間を泳ぎ抜けるのか、水に浮ぶ葉が大きく揺れる。

池に続く湿地では、ミズバショウとザゼンソウの春に備えた巻いた新芽が見られる。

自然林から放牧場に抜ける中央道路の出口の附近で、十指に余るオンコがとうとう枯死した。排ガス、埃、風の吹き抜け等に起因するのは想像に難くない。こうなることを憂えて、ずっと、

自然林の中の車の通行禁止と、防風林の造成を訴え続けているが一向に顧みられない。今にして急ぎ対策を講じなければ、被害は益々拡大する。

誰しも自然保護を口にするが、とかく観光第一保護第二になる。

この時季には、野原や路傍でまだ咲いている草花も多い。

エゾノコンギク、ユウゼンギク、ヒメジョオン、エゾゴマナ、ノコギリソウ、ジャコウアオイ、イヌタデ、タンポポモドキ、セイヨウタンポポなどなど。

オオイヌノフグリ、カキドオシ、ゲノノシヨウコは息が長い。

庭のヒマラヤユキノシタが、今年も二房三房、帰りを咲かせている。

以上が、十月下旬の焼尻の木や草花の様子である。

「年年歳歳花相似」というが、歳月

の間には、林の中でも野原でも、そして道端でも、増えてきた花、減っている花、焼尻の花も変遷している。

コウリントンポポは林床では見られなくなったが、人家附近の草叢で増えている。

オオバユリも絶えるかと案じていたが、林の縁で多数の新根出葉を発見した。四、五年先が楽しみである。

林床のヤブコウジが減少している。道内では奥尻島の自生は知られているが、焼尻にも自生していることを知る人は少い。然しこの儘では消滅する。

道路、側溝の整備や沢の治山工事で極端に減っている花はニホントンポポ、エゾフウロ、ネジバナ、ニリンソウ、ヒトリシズカ、オオバナノエンレイソウ。

殊にオオバナノエンレイソウは既に絶えたものと思っていたところ、沢の奥で二輪咲いているのを見つけた。クロユリも同じように数輪発見した。残っていたくれたかと思うと愛しい。

牧草とともに入ってきたタンポポモドキが在来の草花を押し除けている。

エゾカンゾウ、オオマツヨイグサ、ツリガネニンジンなどの群落が、クマイ笹や茅に覆われてきた。

草花の類は人間が手を貸してやらなければ減っていく。特に残り少ないものは、放置しておけば消えてしまう。

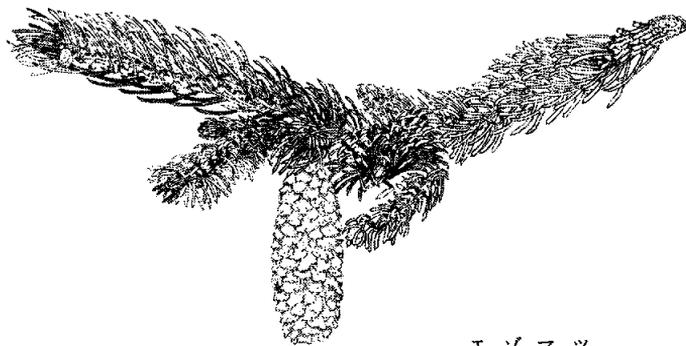
二年前、羽幌町の農政課で、放牧場

の柵に沿って覆土してコスモスの種を播いた。島の花があるのに、と思っていたところ、今年になってコスモスは消えてしまい、跡にオオマツヨイグサの群落が出現した。

怪我の功名だが、手を加えてやれば野の花が蘇る好例である。

この稿の出る頃は、焼尻は雪に埋もれ浜風が荒んでいる。

(磯野旅館主 羽幌町在住)



エゾマツ